

総合研究センター報告書

近代化と学問

相愛大学総合研究センター報告書『近代化と学問』がまとまった。本書は、二〇二二年度から三年間にわたる同センター主催の共同研究の成果である。この研究は、かつての相愛大学人文科学研究所「明治の精神」研究会の経験を踏まえて行われた。同研究会の成果は、鈴木徳男・嘉戸一将編『明治国家の精神史的研究——（明治の精神）をめぐって』（以文社、二〇〇八年）として公刊し各分野で好評を得ているが、人文科学研究所主催であったこともあり、学際性においては必ずしも充実していたとは言えなかった。そこで、さらに対象領域を拡大し、より一層充実した研究を目指して、日本近代における諸学問の歴史を検証することを目的として出発した。

従来、それぞれの学問領域において、学説史などを通じて描かれてきた日本近代における諸学問の形成の歴史を、本学に所属する多様な領域の教員の知見の交換を通じて、再検証するのが目的である。特定領域の内在的形成的場合、西洋の学説の受容と日本の変容として語られるにとどまるのに対して、学際的方法の採用において、一見無関係な領域間に影響関係が見いだされ、そこから日本近代の学問史に新たな相貌が発見されることが期待される。そもそも近代国家の形成と学問の形成とは密接な関係にあり、諸学問は相互に影響を及ぼしながら展開されたことが予想される。本研究では、そうした相互関係に焦点を合わせて諸学問の近代史を捉え直した。

本研究の特色は、学際性にある。歴史学、文学、言語学、教育学、宗教学、栄養学、音楽学など、多様な専門分野の知見を生かすことである。各教員は、それぞれの専門分野の日本近代における成立と展開に関する研究を行い、定期的に関催される研究会を通じてそれぞれの知見を交換し、練り直す。また、必要に応じて学外からも研究者を招へいた。研究会に関しては、広く一般の参加者にも開かれたものとする。このような幅広い研究は、全学的な附置研究所である総合研究センターにおいてこそ可能である。

日本近代の学問の歴史は、例えば次の二つの観点からアプローチされてきたと言えるだろう。

1 学説史的研究

2 大学史研究

すなわち、個々の学問領域において、学説の歴史が分析・整理され、新たな学説の提示に役立てられている。歴史学や社会学などの分野などでは、それぞれの学問史がまとめられ、学説と社会との歴史的関連性が提起されている。また『東京大学百年史』以来、教育学を中心に本格的な大学史研究が行われており、日本近代において大学が果たしてきた社会的役割の検証に役立てられている。

しかし、学説史的研究では、各領域間の相互関係が十分には検討されないし、また大学史研究では、近代知の収蔵体としての大学の人的・

組織的・行政的展開が中心的関心を占めているように思われる。これに対し、本研究は、諸学問の關係性を把握することで、総体としての近代知がどのように形成され展開してきたのかを辿ることが可能であり、それぞれの近代を再検証できる。とくに、西洋から諸学問を受容した日本の場合、歴史学・文学・法学・教育学・宗教学・美学などの諸学は相互に關係しながら展開してきたと思われ、実際、明治期の知識人には複数の領域に係わった人物も少なくない。日本近代における学問の歴史研究には、領域横断的視点が有効であると考えられるのである。

各分野ごとに諸問題を浮き彫りにし、それぞれの学問領域間の關連性や共通性を引き出し、結果として、近代知の形像が明らかにされたかどうか。さらに今後の課題として残された部分は多いだろうが、少なくとも個別的な学説史では把握できない日本近代における学問史のそれぞれの特色が共通認識できた意義はまことに大きい。最後になったが、本研究に協力下さった多くの方々に深甚の感謝を表したい。

今後とも近代化と学問に対する関心に応えらるとともに、日本近代における大学の役割を再検証するという営為を継続していきたいと願うものである。

二〇一五年一二月

相愛大学人文学部教授 鈴木徳男